



三年先の稽古

発行日：令和3年7月9日

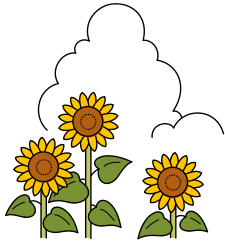
文 責：校長 星野 亜希

♪鉄は打て！打て！熱いうち 夢は抱け！抱け！若いうち♪

※大信中学校ホームページもあわせてご覧ください。

白河市青少年健全育成推進大会

少年の主張「踏み出そう一歩」



7月5日（月）白河市青少年健全育成推進大会の中で「少年の主張」が行われ、白河市内の中学校から代表一名が自分の考えを述べました。本校からは3年吉川マリンさんが「踏み出そう一歩」というタイトルで発表しました。自分の体験をもとに、差別をなくすために自分ができること、中学生ができることについて表現力豊かに考えを述べました。「頭では分かっていたのに…」という揺れる思いが上手く表現されていました。結果、福島民友新聞社賞を受賞しました。

（一部抜粋）

感染予防対策やワクチン接種が始まった今でも見えないウイルスへの恐怖は消えません。私が最初に発した「え、コロナに感染したの」というあの言葉は、傷つけようと思って発したわけではありません。ただ、自分がもしコロナにかかってしまったらと思うと怖かったのです。私と同じように不安や恐怖心から、何気なく発した言葉が感染した人に届き、差別につながってしまった場合もあるのではないのでしょうか。または、心ない人たちが自分本位な立場に立って、感染することが悪いことで、迷惑だと考え言葉にしてしまうこともあるはずです。誰でも差別する側、される側になる可能性がある今。少しでも考え、話し合う場が必要ではないのでしょうか。コロナ差別について、私たち中学生が考え続けていくことで、救われていく人も多いと思います。もしかすると、自分になってしまうかもしれない差別をする側、される側の立場に立ち、その気持ちについて考えていくことが大切です。どんな心が差別につながってしまうのかを。自分の発した何気ない言葉が相手を傷つけていないかを。さまざまな立場に立って一緒に考えましょう。それが差別をなくすための第一歩となるように。

※裏面に全文記載

先日、白河市のホームページに「市はシトラスリボンプロジェクトに賛同しています。」とありました。シトラスリボンプロジェクトは、新型コロナウイルス感染症の感染者や、暮らしを守り、支えてくれている医療従事者等に対する差別・偏見をなくし、たとえ感染しても誰もが笑顔でいられる社会を目指すことを目的として、愛媛県の有志グループが作ったプロジェクトです。学校では、「差別と偏見」について、今後、道徳科の授業でも考えていきたいと思っています。ご家庭でも話題にしていだけたらと思います。



薬物乱用防止教室

7月8日（木）薬物乱用防止教室が行われました。今年度は、保護者の方にも参加いただき、がん教育の一つとして喫煙について全校生で考えました。今回はいわき市のみちや内科胃腸科の齊藤道也先生をお招きし、専門家の立場からお話いただきました。「がんは変異細胞ができやすかったり、治すしくみが働かなかったりすることで起きる。具体的な原因にはタバコ、飲酒、運動不足などの若いときからの生活習慣の影響が大きい。がんは早く見つければ治療しやすいため検診が大切。がんになるのは2人に1人、命を落とすのは3人に1人と適切な早い治療で治すことのできる時代になった。」ことなど、短い時間で大変分かりやすく説明していただきました。特に、「検診は健康なときにやるものです。」というお話は、私たち大人の心に響きました。



喫煙が体に与える影響について知識や理解を深め、一人一人が社会の一員として、それらを防止し、健康な生活を築こうとする態度を身につけるよいきっかけとなりました。

「え、コロナに感染したの。」

友人がPCR検査を受けたという話を聞いたとき、私は思わず息をのみました。昨日の夕方まで話をしていた私の友人が、なぜ、どうしてそんなことになったのかという驚きと一緒に過ごしていた自分は大丈夫なのかという不安で一杯になりました。

しばらくして、そんな事実はなく、友人は健康だということが分かり安堵しましたが、この誤報のおかげで私は本当の自分に気づいてしまいました。

私は、コロナ差別をしない、もし周りに感染した人がいてもその人の気持ちを考えて、温かい言葉をかけたり優しく接したりしようと決めていました。しかし、身近な友人の名前を聞いた途端、相手を心配することよりも自分自身のことを考えてしまうのだという現実を痛感しました。誰しも自分のことが大事です。私も私自身の命が大事ですし、一緒に過ごす家族が大切です。これは、皆さんも同じではないでしょうか。自分のことを優先して心配することは悪いことではないはずです。ですが、なぜか、罪悪感を抱いてしまいます。ニュースで「コロナ差別」という言葉を聞いたときも、外出先のスーパーで、

「コロナに感染していたのに、よく外出できるよね、外に出ないでほしい。」

という声を聞いたときも、私は差別はしない。感染した人が頑張って治療して治ったのに、外出するな、なんてそんな酷い言葉は口にしたくない。大勢の人が聞いている場で口に出して言うのは間違っていると考えていました。しかし、いざ自分の身近で起きたこととなると理想としていた言葉が出てきませんでした。 コロナ差別をなくしましょう。感染した人の気持ちを考え温かく接しましょう。そう学習してきたのですが、頭では分かっている現実とは厳しく、決心していても違う言葉が口から出てしまう。これが目に見えない心の差別であり、罪悪感なのだと感じました。私も、私自身が気づかない内に差別をしてしまったのです。

コロナは急速に広がっています。感染する可能性は私にもあるのです。私が感染者の立場だったらきっと悲しい気持ちになって学校へ行くこともできず、友だちにうつしてしまったかもと不安になり、コロナに感染してしまった自分自身を責めてしまいます。

感染予防対策やワクチン接種が始まった今でも見えないウイルスへの恐怖は消えません。私が最初に発した「え、コロナに感染したの」というあの言葉は、傷つけようと思って発したわけではありません。ただ、自分がもしコロナにかかってしまったらと思うと怖かったのです。私と同じように不安や恐怖心から、何気なく発した言葉が感染した人に届き、差別につながってしまった場合もあるのではないのでしょうか。または、心ない人たちが自分本位の立場に立って、感染することが悪いことで、迷惑だと考え言葉にしてしまうこともあるはずです。誰でも差別する側、される側になる可能性がある今。少しでも考え、話し合う場が必要ではないのでしょうか。コロナ差別について、私たち中学生が考え続けていくことで、救われていく人も多いと思います。もしかすると、自分になってしまうかもしれない差別をする側、される側の立場に立ち、その気持ちについて考えていくことが大切です。どんな心が差別につながってしまうのかを。自分の発した何気ない言葉が相手を傷つけていないかを。さまざまな立場に立って一緒に考えましょう。それが差別をなくすための第一歩となるように。

